

法成寺跡出土の石仏について

清水 早織

はじめに

今回は上京区東桜町内にある埋蔵文化財包蔵地「法成寺跡」から出土した2体の石仏について報告する。

発見となった経緯は、建物新築工事にもない、埋蔵文化財発掘の届出が提出され

たことで、文化財保護課が埋蔵文化財の試掘調査を実施したことから始まる。この試掘調査で、鴨川の氾濫の影響を著しく受けたことにより、法成寺跡の遺構は確認されることはなかった。しかし、近現代盛土内から下半身から台座部分にかけての石仏が出土した。さらに、その後の建物の工事中に新たに全身が遺存する石仏が発見された。

さらに、その全身が遺存する石仏とともに最大幅1.5mの礎石が出土した。この礎石について法成寺跡から巨大礎石が出土したことが新聞記事に掲載された。礎石の規模や形状などから法成寺の遺構の確認ではないかという意見がある一方で、江戸時代後半以降に当地が公家屋敷となっていることから、公家屋敷で平安時代の礎石を模して造られた庭石の可能性も考えられるといった意見もあり、実際にはこの礎石が法成寺に関連するか否かは不明である（京都新聞令和4年4月17日掲載）。

1 法成寺の概要及び調査事例

まず、法成寺について簡単に触れておきたい。法成寺とは平安時代後期に絶大な権力をふるった藤原道長が、病に苦しんだ晩年に造営した寺院である。法成寺は、寛仁3年（1019）に無量寿院が造営されて以

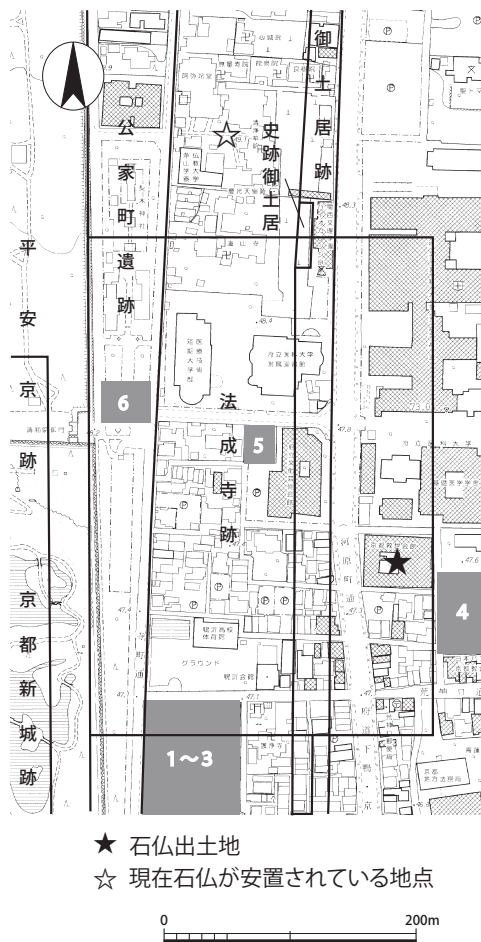


図1 過去の調査事例と石仏出土位置図

降、阿弥陀堂をはじめとして十齋堂、薬師堂、五大堂、講堂、釈迦堂などが次々と造営されていった。当時の様相は極楽浄土を思わせる壮麗さであることが文献に残されている（『栄花物語』）。しかし天喜6年（1058）に法成寺は炎上し、康平元年（1058）に道長の息子である頼通により再建されたが、元弘元年（1331）の火災により、法成寺の建物はなくなり廃絶することとなる。

発掘調査で法成寺の遺構を確認した事例はほぼなく、実態は不明であるが、文献の中には法成寺は緑釉瓦が葺かれていた様子が描写されている（『栄花物語』）。平成26年に今回の対象地から南西側に位置する京都府立鴨沂高校の立会調査を京都府教育委員会が実施した。その調査で、緑釉の軒丸瓦片や平瓦片が複数確認され（事例1）、同年～平成27年に（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センターが実施した発掘調査では、多量の墓石や宝篋印塔、及び数点の石仏を確認している。出土したほとんどが近世以降の墓石であり、法成寺に関連するような石造物は確認されていない（事例2）。ただし、この調査でも近現代盛土の中から緑釉瓦を数点確認しており、法成寺が存在したことを示す資料となっている（事例3）。

また、今回の対象地の東側の調査で、近世・近代の井戸や溝などの遺構の確認はされているが、法成寺跡に関連する遺構・遺物は確認されていない（事例4）。さらに対象地の北西側の調査でも法成寺の遺構は確認されていないが、室町時代以前の鴨川の洪水堆積から緑釉瓦が確認されている。こ

のように法成寺の遺構が確認されていない中、平成26年の発掘調査で法成寺の北限を示すものと考えられる東西溝を確認している。緑釉瓦も多数確認されており、法成寺を検討するうえで重要な成果を得ている（事例6）。

以上のように、発掘調査で法成寺に関連する遺構は事例6以外でほとんど確認されていない。しかし、各調査で緑釉瓦が出土していることは法成寺が存在したことを示す手がかりの一つである。

今回は工事中に発見された石仏を石仏Aとし、試掘調査で確認された石仏を石仏Bとする。調査方法は拓本をとった後、m f s ソフト metashape を用いて3Dモデルを作成した。その測量でソリッド図を作成することによって、肉眼や拓本で確認しきれない石仏の詳細な凹凸の確認が可能となった。

図1の調査事例報告書

- 1 中川和哉・綾部侑真他『京都府遺跡報告集』第172冊（公財）京都府埋蔵文化財調査研究センター 2018年。
- 2 1に同じ
- 3 未報告（平成26年度発掘調査終了報告）
- 4 「46法成寺跡」『昭和52年度 京都市埋蔵文化財調査概要』（財）京都市埋蔵文化財研究所 2011年。
- 5 『寺町旧域・法成寺跡—東桜町の調査—』古代文化調査会 2016年。
- 6 未報告（平成26年度発掘調査終了報告）



図2 石仏A拓本写真

2 石仏A

本石仏は、全身が遺存する石仏である。全長1.1m、幅0.5mである。石材は花崗岩で、光背を舟形状にかたどり、半肉彫りで造られている。首から下部の表現はよく残っているが、首より上部にかけては風化の影響で明瞭に確認することはできない。頭部は摩耗しているため、螺髪か宝冠かの判断はつかない。顔面も風化しており、鼻や目の形状の確認はできない。耳の部分に

については写真や拓本では様相がはっきりとしないが、ソリッド図を確認すると、大きく広がり肩にかかるように表現されている。耳として表現しているにはやや大きすぎるように見える。垂髪の可能性も考えられるが、髪が肩にかかっておらず、背中に向かって垂れている表現の可能性も考えられる。

印相は胸の中央で印を結ぶ。指の形は摩耗して詳細は不明であるものの、右手が左手を覆う状態や印を胸の中央で結ぶ位置な



図3 石仏A拓本 (1:4) 2

どから考えて、智拳印を結んでいると考えられる。右肩から腕にかけての部分には凹線が見られる。臂釧^{ひきん}といった腕輪を模したものを表現していると考えられる。如来などには臂釧は両腕に表現されることが多いが、上半身に身につける条帛^{じょうはく}がかかっている状態のものであると、片腕のみに表現される。本例は左腕には見られないことから、衲衣によって隠れている様相を表現していると考えられる。両腕から脚にかけて衣が垂れる様相が見られ、それも衲衣の表現と考えられる。足の表現は不明瞭である。足を組んでいることは想像できるが坐り方は判断できない。裳がかけられている表現とも考えられる。

背面には刻銘などが記されていれば石仏の時期を判断することができるが、本例において刻銘は確認することはできなかった。

台座は如来や菩薩の台座として最も多く

用いられている蓮華座である。蓮華は蓮が開いたところを真横から見た形の開蓮華のものである。花卉は単弁であり、花卉自体は丸みを帯びるが、先端は尖る。鎌倉時代中期以降に多く使用されるものである。

以上が石仏Aの様相である。様相が判然としない部分もあるが、明瞭な特徴は、印相は智拳印を結ぶこと、右腕に臂釧をつけていること、腕から足にかけて衣が垂れていることである。これらの状況からでも像容は大日如来と考えられる。また、大日如来には胎蔵界と金剛界との区分がされており、両者の像容は印相が異なる。金剛界大日如来は智拳印を結び、胎蔵界大日如来は法界定印を結ぶ。本例は智拳印を結ぶように見られることから金剛界大日如来と考えられる。

そして時期は鎌倉時代中期以降のものと考えられる。



図4 石仏Aソリッド図(左)・石仏A調査前写真(右)



図5 石仏B拓本

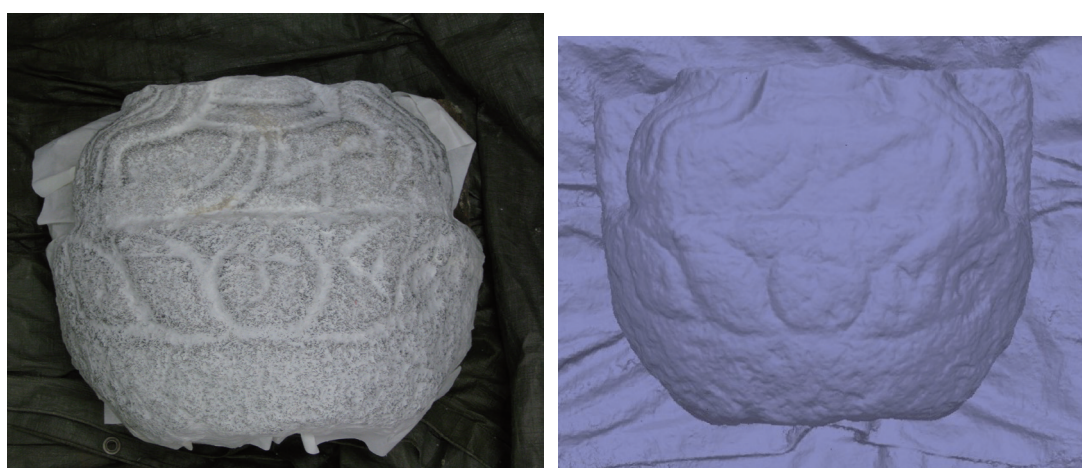


図6 石仏B拓本写真 (左)・ソリッド図 (右)

3 石仏B

本石仏は試掘調査時に近現代盛土内から出土した。残存高は0.39m、幅0.52mである。石材は花崗岩であり、半肉彫りで造られている。上半身が失われており、腰部から台座部分にかけての下半身部のみ残存する。下半身は膝を曲げていることから坐像であることが分かる。腰から両膝にかけて2条ずつゆるやかな線が施されている。また、腹部から左に向かって垂れている表現のほかに右上に向かって表現していると考えられる。腹部には横方向に2条の線が施されており、裳が鮮明に表現されている。台座は蓮華座を示している。蓮華は単弁であり、花卉自体は丸みを帯びているが、先端は三角形に尖る。

印相については腕や手が腹部にないこと



法界定印
(胎蔵界大日如来)



智拳印
(金剛界大日如来)

図7 大日如来の印相模式図

から阿弥陀如来ではないことは言えるが、何を示しているかは不明である。石仏Bについては像容の判断がつかないが、出土場所や花卉の形状が石仏Aと同様であることから大日如来であったかもしれない。上半身が失われていることから時期の断定は難しいが、裳の表現や蓮華座の表現が鎌倉時代中期以降のものに近いことからその時期の作と考えられる。

4 類例数の違いについて

以上、今回石仏Aと石仏Bについて紹介した。

石仏Aについては金剛界大日如来であると紹介した。京都市内には石仏が多数確認されているが、如来とされる像容のほとんどが腹部の中央で印を組む阿弥陀如来である。一方で今回紹介したような金剛界大日如来は類例が少ない。では、この違いを考えてみる。

阿弥陀如来は浄土教が主尊とする仏で、大日如来は密教が主尊とする仏である。また、大日如来には法界定印の胎蔵界大日と智拳印の金剛界大日に分けられる。胎蔵界は仏と人が一体の世界を示す法界定印を結び、金剛界は地・水・火・風・空の五輪を示すとされている。

そして、大日如来を主尊とする密教は平安時代に貴族や上流階級に結びついた人々を中心に広まることとなる。鎌倉時代になると、阿弥陀信仰となる浄土宗が武士や庶民の間で広く普及することになった。加えて平安時代の石仏は軟質の凝灰岩で造られることが多く、石の材質から考えると、風

化が激しく後世に残存するものが少ない。鎌倉時代になると、石の材質が凝灰岩だけでなく硬質の花崗岩を選ぶことによって遺存状況がよくなった。これらの理由から鎌倉時代に石仏の数が圧倒的に増加したものと考えられる。そして浄土宗の普及が貴族・上流階級の限られた人間にとどまらず、庶民にまで広がったことから石仏は阿弥陀如来が大日如来の数を凌駕しているものと考えられる。

5 京都市内の大日如来

【市内石仏1】

石仏Aと類似する例として、北区にある石仏が挙げられる。この石仏は全長1.6m、幅1.1mの石仏である。

写真では顔面は風化して表情を明瞭に確認することはできないが、頭には宝冠をかぶり、両肩に髪が垂れている。両手は胸の



図8 京都市内石仏1 (京都の石仏より転載)

中央で智拳印を結ぶ。以上のことから金剛界大日如来であると判断される。時期は鎌倉時代後期のものである。

【市内石仏2】

京都市北区にある石仏である。全長1.2m、幅0.6m、奥行0.7mの石仏である。全体的に風化しており形状が明瞭でない。過去の研究から胎藏界大日如来であることは知られている。摩耗が進み、衣服の状況は判然としない。ただし、頭上は宝冠をかぶっている部分は確認できる。時期は鎌倉時代のものである。

【市内石仏3】

右京区に石仏群が存在する。この石仏群は像容が定印阿弥陀如来・釈迦如来・薬師如来のものが並ぶ中に胎藏界大日如来が鎮座する。風化が激しく顔面などは判然としないが、体つきや衣服の表現は豊かである。頭には宝冠をかぶる。台座に蓮華を表現しており、形は丸みをおびるものであ



図9 京都市内石仏2



図10 京都市内石仏群



図11 京都市内石仏3

る。この石仏群は胎藏界大日如来を中心として東の薬師如来、南の釈迦如来、西の阿弥陀如来、北の弥勒菩薩を表現する。五仏が揃った状態の石仏群である。この石仏群は大半が鎌倉時代のものであるが、この胎藏界大日如来は平安時代までさかのぼる可能性がある。

まとめ

今回は金剛界大日如来と考えられる石仏

Aと、下半身のみ残存する石仏Bを紹介した。両者に共通するものは蓮華座の花弁が単弁ということである。花弁の表現は平安時代には市内石仏3のように丸みを帯びる形で造られるものが多く、鎌倉時代になると、花弁の先端を尖るように造られる。今回紹介した石仏A・Bはこの時代の特徴を表している。また、近世以降になると、蓮座が側面形となり、蓮弁を薬研彫りしたものが多くなる。

鎌倉時代に浄土宗が広まったことにより、京都市内で見られる石仏のほとんどが阿弥陀如来であることが多いことは先ほども述べた。大日如来は数は少ない。その中で市内石仏2・3などの石仏のように胎藏界の大日如来は知られているが、今回紹介した金剛界大日如来は先に挙げた市内石仏1以外に京都市内ではほぼ類例がなく、珍しい石仏といえる。

今回紹介した石仏2体は鎌倉時代中期以降のもと考えられる。法成寺跡から出土していることから、遺構や遺物がほとんど明らかとなっていない法成寺との関連を想像させる。しかし、今回報告した石仏の作風が鎌倉時代中期以降であることや、金剛界大日如来が真言密教の主尊と考えられている一方で、法成寺は阿弥陀仏を主尊とする浄土宗の寺院であることから、異なる宗派の仏を制作することは考えにくい。さらに、今回紹介した石仏2体とも法成寺の遺構に伴って出土していないことなどから、法成寺と関連付けることは現段階では難しい。今後、法成寺跡の調査が進む中で法成寺の遺構とともに同様の石仏などが出土した際に今回出土した2体の石仏を再検討す

る必要がある。

また、法成寺との関連性を今後の課題とする中ではあるものの、類例の少ない金剛界大日如来の石仏が確認されたことは大日如来を主尊とする真言密教の宗教観を考える上で非常に重要な資料となるであろう。

最後となるが、近年、京都市内で観光客が増加するとともに、石仏に興味を抱き各地の石仏に足を運ぶ人も増加した。大部分の方が分別のある見学をされる一方で、石仏を破損するような痛ましい話も耳にする。社寺や地域にとって大切に守られている信仰の対象であることから、そのような

行動がなくなることを切に願う。

なお、石仏Bは文化財保護課で保管しているが、石仏Aについては後日、寺町通沿に位置する清浄華院で保管されることになり、現在は発見された礎石とともに安置されている。

謝辞

今回報告した石仏Aは清浄華院の取り計らいにより丁寧に保管していただいた。また、報告を書く上で清浄華院の松田道観氏には調査にご協力いただいた上に様々なご教示をいただいた。ここに感謝申し上げる。

しみず さおり
清水 早織 (文化財保護課 文化財保護技師 (埋蔵文化財担当))

参考文献

- 1 清水敏明『京都の石仏』 創元社 1977年。
- 2 川勝政太郎『日本石像美術辞典』 東京堂出版 1978年。
- 3 京都市編『史料京都の歴史7 上京区』 1980年。
- 4 川勝政太郎『新版 石像美術』 誠文堂新光社 1981年。
- 5 大津透『道長と宮廷社会』 日本の歴史 06 講談社 2001年。
- 6 中 淳志『写真紀行 日本の石仏200選』 東方出版 2001年。
- 7 『京都市内遺跡試掘調査報告』 令和3年度 一覧表16 京都市文化市民局 2021年。